

しかし、それだけで、義堯の想いが晴れることはなかった。やはり滅ぼしてしまった王家への後ろめたさを忘れることはできない。

この心中を想い、正木時茂等が中心となって「あれは父の仇討ちだった」

という美談のもと、やむにやまれぬ決起を行ったという筋書きを、口に出して国内に広めていった。

噂も、重ねることで真実となる。

これを歴史の改竄といってしまうばそれまでだが、彼らにも確固たる信念と、彼らなりの正義があった。けっして後ろめたい改竄ではない。

事実、義豊の世よりも治世が潤うことにより、領民は義堯を支持した。

いつの時代も、民衆とはそのようなものである。

「杞憂めさるな」

そう勧める人物との巡りあいがある、このときよりの義堯の生涯を支えた。

妙本寺住持・日我との出逢いは、天文四年、河越出兵の後方本陣として穂田観音寺に布陣していたころのことである。

日我は、日蓮宗妙本寺派のなかでも際立って優れた高僧だった。当時二八歳、僧侶としてはまだまだ若輩ながらも、宗門のなかでも得がたい得を極めていた。

このことは、かつて里見義豊が玉隠英與から認められたような出逢いとは少し異なる。玉隠英與は仏法界の重鎮であり、立場は決して対等でない。寄進や勧請という聖俗を結ぶ関係の上で、たまたま学問や思想が共通したという関係だ。とても対等と呼べるものではない。

義堯は鶴谷八幡宮や那古寺といった宗門の大檀那。

片や日我は日蓮宗。

ふたりの間にあるものは、純粹に人物として信ずるに足るか、否か、損得のない感情だけだった。

そして、二人は宗門聖俗を超えて、無二の友

と成り得たのである。

思えば、義堯にとつての日我は、迷いのなかの一筋の光明であった。個を殺して民のために尽くす、その覚悟を定めたのも、すべては日我との出逢いあってこそと云っても過言ではない。ふたりの立場を越えた友情は、これより、終生続いていくこととなる。

義堯は嫡男・太郎に、折を見ては淡々と里見の歴史を語るようになった。

「父は罪を背負って民に償う。いつかそなたが大きくなったら、この冬のように凍てついた国に、春の暖かさを取り戻せる男となれ。いまは戦国であるが、せめて安房のなかだけは春の国であるよう尽くせ。父はそのために励む、そなたも父の志を継ぐがよい」

「はい」

一〇歳の太郎は頷いた。

義堯の懐には、三男が寝息を立てている。次男は太郎の脇で眠そうに目を擦っていた。若い義堯は、こののちも子宝に恵まれていく。そして、この嫡男・太郎こそ、義堯の跡を継ぐ当主・里見左馬頭義弘となるのである。

里見氏は義堯という類い希な名君を得たことで、新しい飛躍を遂げていく。

安房・西上総を支配する里見氏は、やがて北条氏との縁を断ちきり、独立した戦国武将として、関東戦国史に、颯爽とその名を轟かせるのである。

北条氏との四〇年にわたる抗争は、まさに義堯の歴史と云っても過言ではない。

小弓公方を押し立て、房総の雄として、里見刑部少輔義堯はどっしりと久留里に腰をおろして、敵を討ち倒し、民を慈しみ、花も実もある武将として慕われた。その財産は、すべて父・実堯や祖父・義通から引き継いだものであった。「春のような國をつくりたい」

義堯の想いは人々に支持された。

そして、その想いは、子に受け継がれていく。

運命の国府台決戦が勃発するのは、北条と手を切った翌年のことである。

〈了〉

注記

本編は記録のなかから紐解く形で執筆しておりますが、前期里見氏のことは、依然として謎が多いです。今後、研究が期待される分野のひとつであり、新たな発見があることと思われます。このたびの記述については、僅かに現存する記録や史実・事件を基にしながら、創作に頼る部分も多いことをご了承ください。

本編の末より、物語は「春の國」へと続く構成となっております。

十
十
十

明日への飛翔(2)

夢酔 藤山